

実践報告：初級コースからの「課題遂行型」授業の試み
 Practical Report: Task-Based Language Teaching at the Beginners' Level

岩田園美コンスル、マクマスター大学
 Sonomi Iwata-Consul, McMaster University

1. 背景

グローバル化に伴い、言語教育も変わり続けており、語彙や文法の知識に加え、コミュニケーション力や課題遂行運用能力などが重視されるようになった。文法学習を中心にデザインされた教科書から、「何ができるか」を目標とした「課題遂行型」の教科書も増えてきた。

本校の日本語のコースでは、2021年より Can-do を目標として各課がデザインされ、課題遂行型授業に適している国際交流基金によって開発された『いざいざ生活の日本語』を使用することになった。この教科書を通して、これまで4期（秋コース2回、春コース2回）にわたって、いかに課題遂行型授業を効果的に行うかの試行錯誤を繰り返してきた。中級者に課題遂行型授業を導入した研究は発表されているが、初級者に関する発表はほとんどないため、今発表では、課題遂行型授業を導入してみて、これまでの経緯とこれからの課題、学習者の課題遂行型授業に対する認識などを報告する。

2. 課題遂行型教授法 (TBLT) の定義

課題遂行型教授法 (TBLT) は、第二言語習得研究 (2LA) の分野から生まれ、応用言語学者のマイケル・ロングが体系化した教授法、及び教育思想である。ロングは、自身の提唱する相互交流仮説を発展させ、タスクに基づく言語教授法を提唱。英語では “Task-Based Learning and Teaching” や “Task-Based Language Teaching” などと訳される。

百済 (2013) は、課題遂行型教授法を Willis (1996) の Task-Based Learning の枠組みから日本語言語教育に応用し、課題遂行型教授法は、「コミュニケーション活動を通して意味に第一の焦点を向けさせること」と「言語形式を明示的に教えること」をより自然な形で統合することができるとしている。

又、「課題遂行型教授法 (TBLT)」では、PPP (presentation-practice-production) として一般的に知られる指導方法を逆にしたような手順、プレタスク-タスクサイクル-言語分析 (Appendix A) で指導される (Willis 1996) と述べている。

小柳 (2020) は、学習者が日常生活、あるいは学業や仕事などの場面で遭遇し、遂行しなくてはならない課題や具体的な行動目標のことをタスクと呼び、課題遂行型教授法では、習得は、文型単位ではなく、タスク単位で進むことが前提となっており、できるタスクが増えていくと、日常生活、あるいは、学業や職業の領域でできることが増えていくと述べている。また、授業で扱ったタスクの類推で、授業では扱わなかったタスクにも応用してできることが増えていくのではないかと推測している。

3. 本校の日本語コースの概要

マクマスター大学の日本語初級コース Japanese1Z06 (6 単位) について述べる。

3.1 学習者の特徴

学習歴は、初めて日本語を学ぶ学習者を対象としている。学習者の言語的背景は、漢字圏の学習者が 80%、英語圏の学習者が 20%となっている。学習者数は 120 名で、言語のクラスとしては、かなり大きく、このことから評価法も限られてしまった。

3.2 コースマテリアル

コースマテリアルに「いろどり入門 A1」を使った理由は以下の通り。

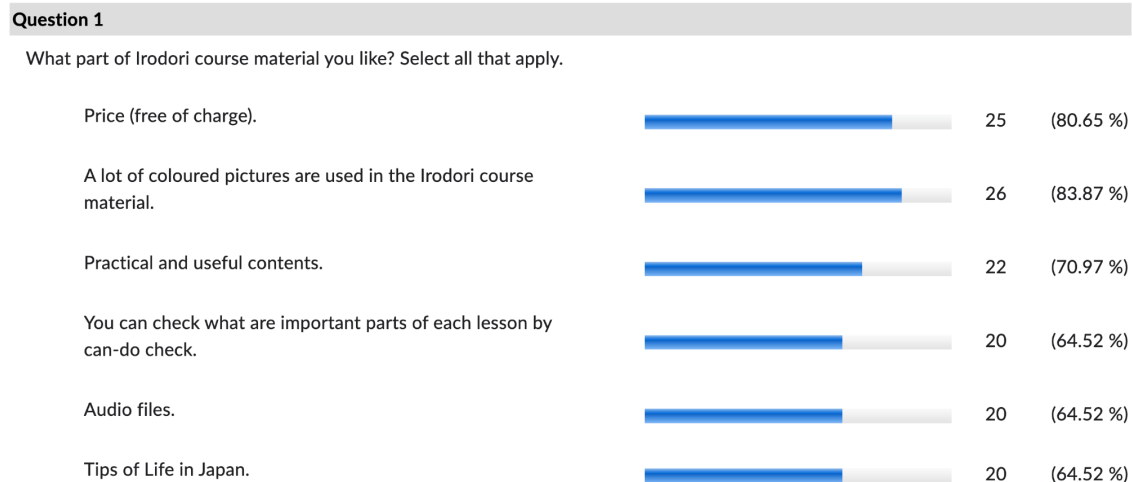
- Can-do を目標として各課がデザインされ、課題遂行型授業に適していた。
- クラスの生徒の約 1/3 が日本に行ったことがあり、残りの 2/3 も将来は日本に行ったり、日本で生活してみたいというアンケートの結果を元に、日本で実際に生活する時に使える実践的な日本語が学べる教科書を探していた。
- 2020 年からコロナ感染の拡大で授業がオンラインとなり、海外から受講する生徒が増えた。「いろどり」はオンラインで無料で提供されていたので、世界のどこからでも自由にダウンロードして使えることができた。

今学期、コースの三分の一が終了した時点で、生徒にいろどりのコースマテリアルについて好きなところを聞いたところ、120 人中 31 人が回答した。

表1 アンケート「いろどり」の好きなところ

Completion Summary

31 attempts have been completed



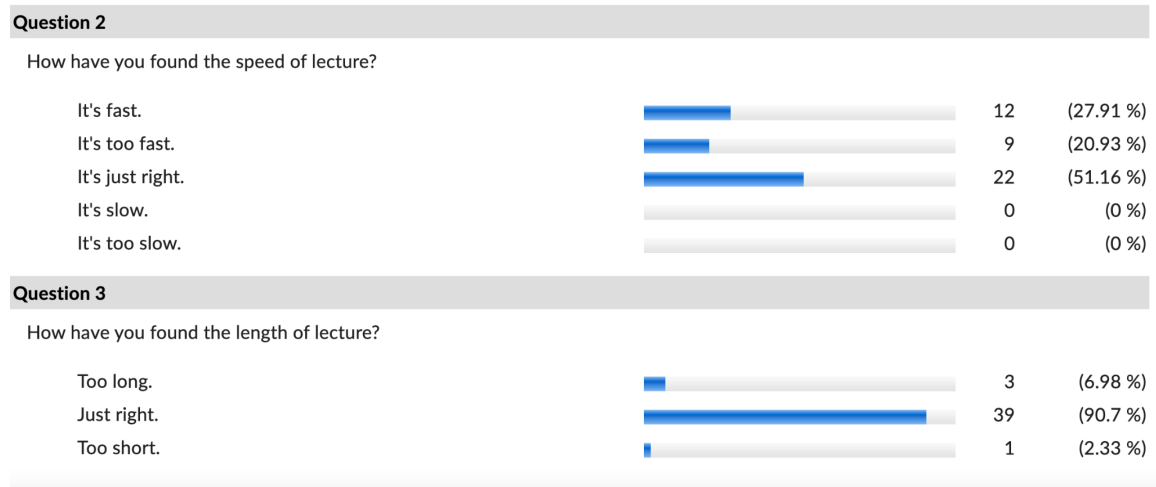
80%以上の学習者が、無料で色彩豊かな「いろどり」を好ましいと感じ、続いて、内容が実践的で便利である点が気に入られていた。Can-do checkでわかる重要なポイントやいろいろな年齢や職業の日本人の生の声が聞けるオーディオファイル、日本の文化の説明が英語と日本語で書かれている「日本の生活 Tips」も約65%の学習者が気に入っていた。

3.3 日本語コースの期間と速度

本校の日本語コースは、春夏学期は週に2回X3時間の授業。3時間で1課を終わらせる=>1学期（5月から8月まで）で1課から18課まで終了する。秋冬学期は週に1回X3時間の授業。2学期（9月から4月まで）で1課から18課まで終了する。平均的な1回の講義の長さは2時間半だった。

授業の速度や長さについてのアンケートでは、速いと速すぎると答えた学習者とちょうどいいと答えた学習者が半々だった。授業を受ける前に予習しておくようにと言ってあったが、なかなか予習できない学習者にとっては、少し早く感じたかもしれない。予習ができていた学習者にとってはちょうどよかったと感じられたようだ。授業の長さに関しては、90%の学習者がちょうどいいと回答した。

表2 授業の速度や長さについてのアンケート



3.3 授業の流れ

課題遂行型授業は次の手順で行われた。

1. 準備：トピックに関連する質問をして、関連する言葉を引き出す（ブレインストーム）。
2. Can-do とその日の授業の確認
3. ことばの準備
 - ①絵を見ながら聞く
 - ②音声を聞いて繰り返す

- ③音声を聞いて絵を選ぶ
4. 会話例を聞いて、内容を理解する。
 5. 形に注目：会話内で使われていた文法や表現を学ぶ。
 6. 文法の説明：文法の形の作り方や意味を学ぶ。
 7. 話す
 - ①会話を聞く
 - ②会話をシャドウイングする
 - ③ロールプレイする
 8. 漢字
 - ①形から意味を想像する
 - ②読む
 - ③書く
 9. 今日学んだことについて SNS に書く
トピックは、私/ぼくの朝ごはん, 私/ぼくの家, 私/ぼくのしゅみ等
 10. 日本の生活 TIPS を生徒に読んでもらう
 11. Can-do を見ながら、学習したことを確認する。
授業の後、講義で学んだことをテストする。
 1. Can-do check (クイズ)
 2. カルチャークイズ (True or False)

3.4 評価方法

本来なら、ポートフォリオやコミュニケーション能力など、一人一人の生徒の学習効果を詳細に見るべきだが、1人で120人の生徒を担当しているためリスニングや読み、書き中心の評価となってしまう。初心者なので、インプットがある一定数に達するまで、発話能力を評価するのは、控えている。

1	Culture Quiz	8%	9 weekly culture quizzes (8 X 1 = 8) (The lowest will be eliminated)
2	Can-Do Check	17%	18 Can-do check (17 X 1 = 17) after each class (The lowest will be eliminated)
3	Quizzes	25%	5 online quizzes (5 X 5 = 25)
4	Mid Term Exam	20%	Online open book exam in June 22 nd ~28 th , 2022
5	Final Exam	30%	Online open book exam in July 27 th ~August 3 rd , 2022

1. カルチャークイズ：週に1度、いろどりの「日本の生活 TIPS」から日本の文化的知識を確認する True/False 問題を出す。
2. Can-Do チェック：各クラス後に課題を遂行できたかを確認するクイズ。
3. クイズ：課題遂行のために必要な文法を中心としたクイズを5回。
4. 中間試験：春学期の最後に授業で学んだことが身についたかどうかオンライン筆記試験をする。
5. 期末試験：話す能力以外のコースで学んだ全体的な日本語能力を評価する学期末試験。

4. 学習者の課題遂行型授業への認識

学習者が TBLT をどのように認知しているかのアンケートを Hadi (2013) の質問を参考にして実施した。5段階評価(Strongly Agree 強く同意する, Agree 同意する, Undecided, わからない Disagree 反対する, Strongly Disagree 強く反対する)で回答してもらった。質問(岩田, 2022 訳)は以下の通り。

- 質問 1: TBLT は学習者の学力の向上を促す。
- 質問 2: TBLT は学習者のインターアクション技能を向上させる。
- 質問 3: TBLT の教材は実用的な内容を基本として有意義で目的を持ったものであるべきだ。
- 質問 4: TBLT によって協働学習を経験できた。
- 質問 5: TBLT は学習者に内在する動機を高める。
- 質問 6: TBLT は小さなグループワークやペアワークに適している。
- 質問 7: 教室の外で学習者が目標言語に触れる機会が少ない外国語学習環境では、TBLT は特に役立つ。
- 質問 8: TBLT は学習者のコミュニケーションを目的とした実用的な言語使用を促進させる。
- 質問 9: TBLT に慣れていないので、講義重視の教授法や教師主導の授業の方がよく学習できたと思う。
- 質問 10: 目的言語を使う自信がないので、TBLT に対して消極的だ。

学習者による回答は Appendix B を参照のこと。

5. まとめと今後の課題

アンケートによると、本校の初級日本語学習者は、ほとんどが課題遂行型授業が学習の向上を促し、人とやりとりする技能を高め、学習意欲を高めるなどその効果を肯定的に捉えてくれていたが、同時に課題遂行型授業に慣れていない、また、日本語を使う自信がないなどの理由から、課題遂行型授業に消極的な学習者も多かった。授業では、ペアワークやグループワークなどで、課題遂行のための練習に多くの時間を割いたが、それでも尚、課題遂行型授業に慣れていない、日本語を使う自信がないと感じる学習者もいたことは残念だった。このコースでは、インプットを繰り返し何度も聞かせたが、初級学習者にとってクラスの中だけのインプットでは足りないらしく、アウトプットが難しいようだった。

しかし、だからといって、初級日本語クラスでは課題遂行型授業をやるべきではないと決めつけるのは稚拙な気がする。課題遂行型授業では、多種の新しい言語の教え方を考案できる (Hadi 2013) だけでなく、各学習者の文化を取り入れたり、テクノロジーを取り入れたりして授業をより楽しく活発にすることができる (González-Lloret 2015)。そして、学習者が「将来、実生活の中で日本人と接

触する場面で、授業の活動を思い出し、満足できるやりとりが「できる」ことを実現してくれる」（青木 2019）日が来ると思う。

時間がかかるとは思いますが、学習者が課題遂行型授業を心地よく感じるようにするにはどうすれば良いか、これからも試行錯誤を続けてみようと思う。1クラスの人数が多すぎるのと、授業時間数が足りないという問題と向き合いながら、コミュニケーション能力をいかに適正に評価するかがこれからの課題となるだろう。

参考文献

青木裕美 (2019) 中級日本語コースデザインの改訂・実践報告：文系先行型から課題遂行型へ CAJLE Annual Conference Proceedings https://www.cajle.info/wp-content/uploads/2019/09/05_CAJLE2019Proceedings_AokiHiromi_Final.pdf

奥村美奈子・櫻井直子・鈴木裕子 (2016) 『日本語教師のための CEFR』 くろしお出版

国際交流基金 (2020) 「いろどり生活の日本語」 <https://www.irodori.jpf.go.jp/>

国際交流基金 (2018) JF 生活日本語 Can-do https://www.jpf.go.jp/j/urawa/j_rsorcs/seikatsu.html

百済正和 (2013) 「TBLT の日本語教育への応用と実践—タスク統合型の言語教育デザインに向けて—」 『第二言語としての日本語の習得研究』 第 16 号第二言語習得研究会 74-79

小柳かおる (2020) 『第二言語習得について 日本語教師が知っておくべきこと』 くろしお出版

Atefeh Hadi (2013). Perceptions of Task-based Teaching: A Study of Iranian EFL Learners. *English Language Teaching* 6:1 (pp. 103-111). Canadian Center of Science and Education.

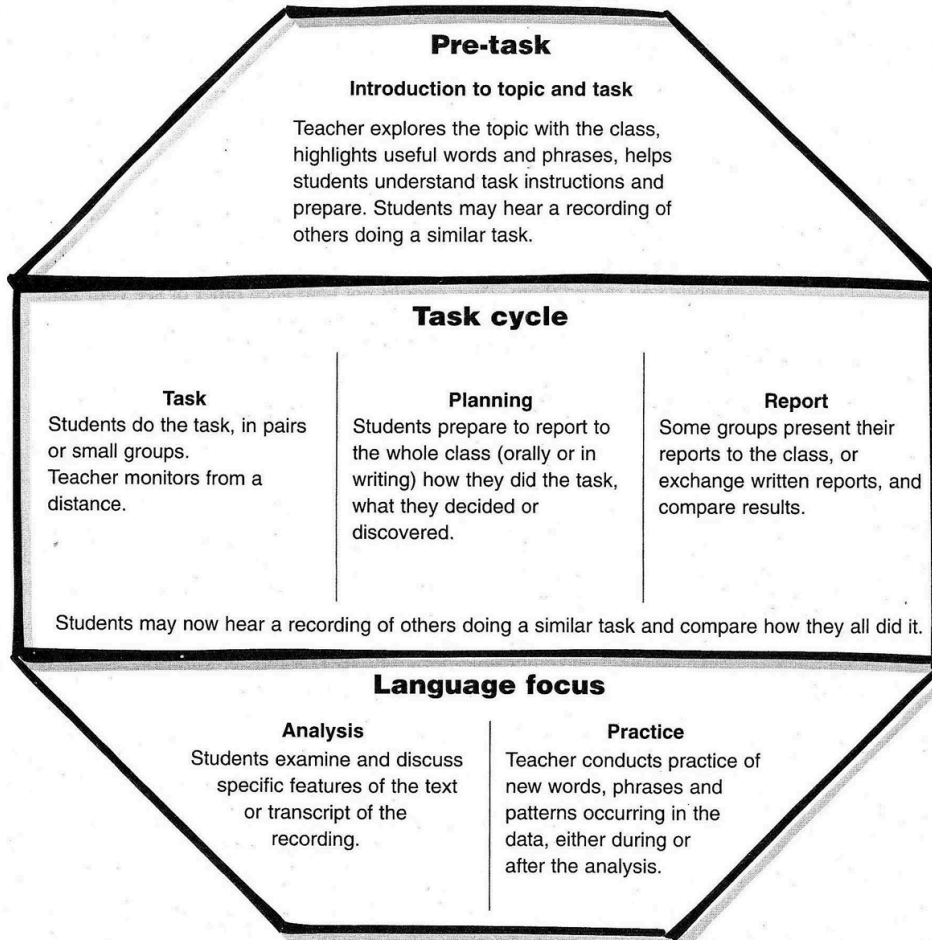
Marta González-Lloret (2015). *A Practical Guide to Integrating Technology into Task-Based Language Teaching*. Georgetown University Press.

Willis, J. (1996). *A framework for task-based learning*. Harlow, UK: Addison Wesley Longman.

Willis, D., & Willis, J. (2007). *Doing task-based teaching*. Oxford: Oxford University Press.

Appendix A

Components of the TBL framework



(Willis 1996: 38)

Appendix B

Completion Summary

34 attempts have been completed

Question 1

TBLT encourages learner's academic progress.

Strongly Agree		18	(52.94 %)
Agree		16	(47.06 %)
Undecided		0	(0 %)
Disagree		0	(0 %)
Strongly Disagree		0	(0 %)

Question 2

TBLT improves learners' interaction skills.

Strongly Agree		19	(55.88 %)
Agree		14	(41.18 %)
Undecided		1	(2.94 %)
Disagree		0	(0 %)
Strongly Disagree		0	(0 %)

Question 3

TBLT materials should be meaningful and purposeful based on the real-world context.

Strongly Agree		22	(64.71 %)
Agree		12	(35.29 %)
Undecided		0	(0 %)
Disagree		0	(0 %)
Strongly Disagree		0	(0 %)

Question 4

TBLT creates a collaborative learning experience.

Strongly Agree		16	(47.06 %)
Agree		16	(47.06 %)
Undecided		2	(5.88 %)
Disagree		0	(0 %)
Strongly Disagree		0	(0 %)

Question 5

TBLT encourages learners' inherent motivation.

**Question 6**

TBLT is suitable for small group work or pair work.

**Question 7**

In foreign language learning contexts where students have little exposure to the target language outside the classroom, TBLT can be specifically helpful.

**Question 8**

TBLT promotes learners' actual language use for communicative purposes.

**Question 9**

I'm not accustomed to TBLT, and I could have learned better with lecture-oriented methods and teacher-centred classrooms.

**Question 10**

I'm not confident using the target language, so I was reluctant toward TBLT.

